

高等学校における外国語の歌の取り扱いに関する考察

— 中国語の歌を用いた授業を例に —

伊藤 真

歌詞は音楽の重要な構成要素の1つであり、歌唱活動において歌詞の発音は極めて根源的な課題といえる。しかし、学習指導要領解説では「歌唱」領域ではなく「鑑賞」領域において歌詞の発音に関する明確な記述がみられる。この課題に対して、まず高等学校の音楽の教科書に掲載されている歌唱曲を言語別に概観し、歌詞の取り扱いについて検討を行う。また、生徒の多くが学習経験のない中国語をとり上げ、教科書掲載「草原情歌」を教材に発音を意識した授業実践を報告する。最後に、教科書掲載「草原情歌」の現状について検討する。

1. はじめに

「歌唱」は音楽の授業において基幹となる重要な学習領域の1つである。このことは我が国の学習指導要領の「表現」領域冒頭に歌唱活動に関する文言が明記されていることから明らかである。

一般的に高等学校の音楽の授業では、日本語の歌を主軸としながら外国語の歌も多くとり上げられる。これらの言語1つひとつにはそれぞれ異なった発音や響きなどの特徴があり、言葉のもつ雰囲気を感じ取りながら歌唱することは、音楽の授業における楽しみの1つととってもよい。しかし、音楽の授業数の削減、音源や資料の不足、そして音楽担当教員の専門性などのさまざまな制限によって、単に歌って雰囲気を感じ取ることに重点が置かれ、必ずしも歌に付された歌詞の発音を深く掘り下げて授業を行うことは容易ではない。とはいえ、真の意味で歌を歌うには付された歌詞の発音に目を向けることを決して怠ってはならない。なぜならば、そもそも音楽は作曲者（あるいは作詞者）から一般の人へ、演奏者から聴衆へのメッセージの一伝達手段であり、歌詞はメッセージの送り手と受け手のコミュニケーションを媒介するという重要性を含んでいるからである。

歌に付された歌詞の発音を言語的見地（あるいは音声学的見地）からとらえ、言語の発音そのものを「音楽としての音声」として音楽表現に生かすことは、音楽の授業において生徒の音楽性の伸長を図ることに寄与するだけでなく、生徒の聴覚を刺激しさらにその情報をもとに音を発する一連のプロセス——すなわち、生徒自身の身体を用いて「構音」する作業——を経るため生徒の自己内において試行錯誤を生じさせることができる。

以上を背景に、これらの基礎的研究として、本稿ではまず学習指導要領解説における「歌唱」の取り扱い

について考察し、次に音楽の授業では扱われることのない中国語の歌を用いた授業実践例を提示し、外国語の曲を扱う際の留意点について教科書の問題点も含めて考察を行うことを目的とする。

2. 学習指導要領解説における「歌唱」の位置づけ

2.1 高等学校学習指導要領解説における「歌唱」

高等学校学習指導要領解説¹⁾の音楽I（以下、「学習指導要領解説」と記す）では、歌唱の取り扱いは次のように記述されている。まず、「3.内容 A.表現 (1)歌唱」の「ア 曲種に応じた発声の工夫」では、「曲種」を「我が国の伝統音楽や世界の諸民族の音楽を含めた音楽の種類を意味する」と定義づけた上で、「発声の仕方には曲種によって様々な違いがあることを理解し、それぞれに応じた発声に基づいて表現を工夫できるようにすることを目指している」とあり、また「曲種に応じた姿勢、呼吸法、共鳴法の基本的な発声法に留意することが大切である」²⁾と記述されている。これらの記述からは、いわゆる「発声法」³⁾に関することに重点が置かれており、換言すれば、一見しただけでは言語の発音について具体的に（意図的に）深く掘り下げることは読み取ることができない。もちろん、記述中にみられる「発声」とは、音楽では「声帯の調節法だけではなく、呼吸法・構音法などを含めて広義の発声器官の使用法を指す」⁴⁾。しかし、学習指導要領解説の該当の記述からは構音（調音）までを意図しているとは考えないのが普通であろう。なぜならば、先に示した「曲種」の定義は、世界の諸民族や諸地域における音楽文化の差異から生じた音楽ジャンルのみを示しているからである。

「ウ 歌詞及び曲想の把握と表現の工夫」では、「歌唱曲における曲想は、歌詞とのかかわりが重要な意味をもつことから、歌詞の内容、言葉のリズムやアクセ

ント、イントネーションなどが、音楽とどのように結び付いているかを理解させることが重要である」⁵⁾と記述されており、歌詞や言葉の重要性を示す表現がみられる。また続いて、『「表現の工夫」とは、(中略)例えば、言葉のもっている語感の把握、子音・母音の配分や濁音・鼻濁音の程度の工夫等、曲にふさわしい表現の仕方を生徒に工夫させることである」⁶⁾とあり、曲にふさわしい表現のためには歌詞の意味内容だけではなく、歌詞のもつ音響的要素に注意することが重要であることが読み取れる。

「B 鑑賞」の「ア 声や楽器の特性と表現上の効果」では、「声」の響きに関する記述の中で、民族や音楽の種類による「固有の発音法・発声法・歌唱法」という表現がみられ、発音(法)と発声(法)を明確に分けてとらえていることが分かる。また、「エ 世界の諸民族の音楽の種類と特徴」では、音楽のとり上げ方として初めて「言語」という表現がみられる。

2.3 学習分野による「発音」・「言語」の取り扱いの差

以上のことから、学習指導要領解説では歌詞や言葉などの言語に関することや、言語の発音に関することに触れていることが分かる。

ここで、歌唱(「表現」に含まれている)および鑑賞の2つの学習領域における「発音」・「言語」の取り扱いに注目したい。先に検討した学習指導要領解説では、「歌唱」(すなわち、呼吸を声門や共鳴腔などの発声器官を経て「声」または「歌声」として実際の音にする活動である)の項において、狭義の「発声(法)」を中心に子音・母音、濁音・鼻濁音といった、いわば言葉を発音する際の最低限の注意事項が記述されているにとどまっている。一方、歌唱活動を必ずしもともなわない「鑑賞」の項において「発音法」、「発声法」、および「歌唱法」といった表現がみられ、歌うことに関する一連の活動をさらに細分化してとらえているといえよう。しかし、本来ならば、これらの表現は「鑑賞」ではなく「歌唱」の項に含まれているべきである。すなわち、学習指導要領解説の記述からは、歌唱活動の中に存在する「歌詞(言葉)の発音(または構音)」の重要性が決して高いものではないことがうかがえる。

3. 教科書による歌唱教材の言語別比較

新学習指導要領における音楽学習の重点の1つとして、我が国を含む世界の諸民族の音楽を広く扱うことが挙げられるが、各出版社の教科書の内容もこの新学習指導要領に対応したものになっている。現在、高等学校の芸術科音楽の教科書(音楽I)は、音楽之友社、教育芸術社、教育出版の3社から各2種ずつ出版され

ている。これらの教科書に含まれる歌唱曲(および歌唱曲に準ずる曲)の数を歌詞の言語別にまとめたものが図1である。ここでは、1つの曲に複数の言語の歌詞が付されている場合にはそれぞれを1曲としてカウントしている。

6種の教科書に共通しているのは、日本語の歌詞の歌が全歌唱曲の約半数以上を占めていることである。これには純粋な日本の曲に加えて、外国の曲であるが日本語の歌詞(訳詞)が付されているものが多くあり、「新 高校生の音楽1」(音楽之友社)には30曲、「新 高校の音楽1」(音楽之友社)には25曲、「高校生の音楽1」(教育芸術社)には12曲、「Mousa 1」(教育芸術社)には7曲、「Tutti 音楽1」(教育出版)には9曲、「高校音楽1 MUSIC ATLAS」(教育出版)には14曲が掲載されている。これらはさらに原語の歌詞と日本語の訳詞を併記しているもの、日本語の訳詞のみを記載しているものに分類ができる(表1)。「外国の歌はできるだけ原語で歌いたい」、「原語の方が曲の感じがでる」という生徒が多いことから、可能な限り原語による歌唱を積極的に取り入れるのが望ましいのではないだろうか。

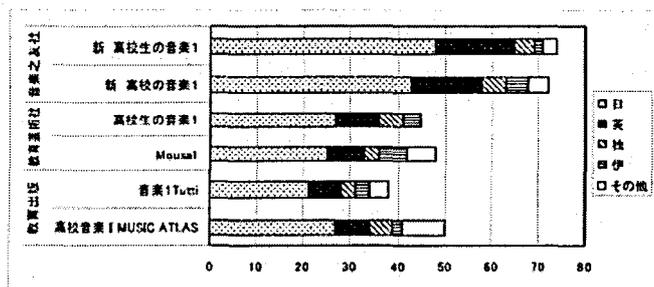


図1 教科書別 歌唱曲言語比較

表1 教科書別 訳詞記載曲数

出版社	教科書名	原語+訳詞	訳詞のみ
音楽之友社	新 高校生の音楽1	24	6
	新 高校の音楽1	21	5
教育芸術社	高校生の音楽1	7	5
	Mousa 1	7	0
教育出版	Tutti 音楽1	9	0
	高校音楽1 MUSIC ATLAS	14	0

4. 授業実践例

4.1 目的と方法

授業実践の目的は2つある。まず先述したように、音楽の授業における歌唱活動の占める割合やその位置づけは極めて高いものであるが、いかにのびのびとした声を出すか、正しい音高やリズムで歌えるか、あるいは歌詞の意味や曲の雰囲気を感じ取って歌えるか、などに重点が置かれがちである。確かにこれらは音楽的な基礎的学力として位置づけられるものの1つであ

るが、歌うという行為には歌詞の発音がともなう場合が多く、歌詞がうまく発音できないために声が出にくく結果として思うように歌えないという生徒が少なくない⁷⁾。そこで第1の目的は、歌唱活動の基礎として歌詞の発音を意識的に位置づけることである。また、歌詞は単なるヴォカリーズではなく意味のある言葉であり、メッセージを他者に伝えるものである。これらを考慮すると、歌詞の発音を意識化することは生徒の音楽的発達を促進することにつながると考えられる。重要なことは、歌詞そのものが音楽的要素を多く含んでいることに気がつくことである。したがって第2の目的は、発音（ディクション）を重視し、歌詞（言葉）そのものがもつ響き（＝言葉の意味）を基盤とした「うたづくり」をすることである。

今回授業の対象としたのは音楽を選択している高校1年生（89名）である。実施時期は2004年11月、12月および2005年1月である。使用教材は、孟浩然の漢詩「春暁」、中国青海地方民謡「草原情歌」⁸⁾、その他鑑賞教材として谷川俊太郎作詞・高井達雄作曲・姜小青訳詞「鉄腕アトム」、「草原情歌（在那遙遠的地方）」（崔岩光）、「草原情歌」（KRYZLER & KOMPANY）、「左脚右脚」・「進化夢」（梁詠琪）、「我可以」（游鴻明）および「情不自禁」（陳慧琳）である。歌詞（言葉）の発音に意識させるために、ほとんどの生徒が触れたことのない中国語（普通話）をとり上げた。中国語には四声をはじめ有気音・無気音、唇音・舌尖音・舌根音・舌面音・捲舌音・舌歯音、声門閉鎖、eやüの発音、鼻母音など、日本語とは異なる発音も多く含まれており、発音に関わる運動（構音）を意識的に行うには適している。授業の方法は、まず中国語の発音に慣れることから始め（第1次）、漢詩の朗読（第2次）、中国語の歌の歌唱（第3次）へとつなげ、さまざまな中国語の歌の鑑賞（第4次）でまとめを行う。

4.2 授業の実際と生徒の様子

4.2.1 <第1次>中国語の発音に慣れよう（2時間）

第1時

ここでは四声の発音をはじめ、日本語と大きく異なる母音・子音、その他注意すべき発音をとり上げ、適宜中国語の音節表を用いながら、基本的な中国語の発音を習得する。その際に重要なのは、中国語のもつ音響的な美しさを感じ取りながら構音運動のトレーニングを行うことである。

有気音と無気音の違いは、子音を発音する際の息の出る（あるいは漏れる）速度と量によって「仕分け」をすることができる。生徒の発音を観察すると、無気音がどうしても濁音になる傾向が強いため（例えば、

da を日本語の「ダ」のように発音してしまうなど）、息をなるべく出さないように留意する必要があった。その他にも、我々日本人が苦手とする zhi, chi, shi, ri の発音は、やはり容易に構音することができなかつた⁹⁾。

第2時

前時と同様に発音の集中的なトレーニングを行った。また、簡単な挨拶、簡単な単語、数字の読み方などを利用し、徐々にまとまりのある文を扱うように発展させる工夫をした。

また、中国語に対する生徒のモチベーションを保つために、身近な言葉を中国語で黒板に書き、それが何を示すかを当てるクイズを出題した。また、生徒が中国語の発音にさらに親しむことができるように、生徒全員の名前をピンインで表記したプリントを配布し、1人ずつ発音を教え、自分の名前が中国語で発音できるようにした上で、自己紹介のスキットを用いて、2人組で会話練習を行った。まだ中国語の発音に十分慣れていないため、ピンインを頼りに発音することは困難な状況であるが、生徒は積極的に活動に参加していた。

4.2.2 <第2次>漢詩を読もう（1時間）

第3時

前時に引き続き基礎的な発音の練習を行った上で、中国語の音響的な美しさを感じ取るために、なじみのある漢文（孟浩然「春暁」）の朗読を行った。生徒は古典の授業においてちょうど「春暁」を学習しており、タイムリーな教材選択となった。本時ではまず、生徒が聴覚に集中するように目を閉じさせ、授業者（筆者）が2度朗読した。次に、もう一度朗読し、生徒は漢詩のプリントを見ながら音と漢字を一致させる作業を行った。そして、漢詩に併記したピンインを参考に、朗読の練習を行った。できるだけ大きめに朗読するように留意した。ここでのねらいは、中国語の音声を意識的に、またある種の音楽として聴くことである¹⁰⁾。また生徒自身に朗読させることにより、聴覚的な活動を構音運動へと連続させる。すなわち、自らの発音練習によって聴覚的な活動をさらに意識的なレベルに引き上げるのである。

4.2.3 <第3次>中国語の歌を歌おう（3時間）

第4～6時

ここでは「草原情歌」の歌唱を中心とした授業を行った。日本語訳詞による歌唱で曲の雰囲気を感じ取った後に、中国語による歌唱を行った。その際には、簡体字や単語の説明、中国語の歌詞の解釈を行った上で、

歌詞のディクションを十分に行うことに留意した。なお、生徒に配布した楽譜には日本語訳詞および中国語歌詞（簡体字）のみを記しており、別に用意した参考プリントを用いて、歌詞のピンインを楽譜に書き込む作業をとり入れた。これはカタカナ表記による発音の間違いを少しでも減少させるねらいがある。

さらに、この「草原情歌」が日本で親しまれているものと中国で歌われているものとは旋律が異なっていることを、楽譜および音源を用いながら提示し、時代や地域による民謡の変異性について考えさせた。ちなみに、本授業では、楽譜資料として中国の人民音楽出版社「声楽曲選集 中国作品（一）」所収の《在那遙遠的地方》、音源としてソプラノ歌手の崔岩光が歌唱しているCDを用いた。また、KRYZLER & KOMPANYが演奏する「草原情歌」はヴァイオリンの音をデジタルサウンドと融合させた曲であり、ジャンルの壁を越えて再創造された一例として提示した。

4.2.4 <第4次>さまざまな中国語の歌の鑑賞（1時間）

第7時

本授業の歌唱教材としてとり上げた「草原情歌」は、我が国の教科書では中国で親しまれている民謡の1つとして取り扱われている。我が国の音楽がそうであるように、中国の音楽にもさまざまなジャンルが存在する。したがって、「草原情歌」＝「中国」というステレオタイプの図式を定着させる危険性を回避するために、音楽の多様性という観点から、他のジャンルにおける中国語の歌を生徒に触れさせる機会が必要だと考えた。そこで、本時は一連の授業の総括として、「さまざまな中国語の歌の鑑賞」というテーマを設定し、主に童謡とポップスを取り上げた。とり上げた歌は全部で6曲、すなわち、①「鉄腕アトム」（姜小青訳詞）、②北京の童謡「正月歌」、③「左脚右脚」（梁詠琪）、④「進化夢」（梁詠琪）、⑤「我可以」（游鴻明）、⑥「情不自禁」（陳慧琳）である。①はTVアニメ「鉄腕アトム」の主題歌に姜小青が中国語の訳詞を付したものである。メロディーを知っている生徒が多く、近年TVコマーシャルでも使用され、なじみやすい曲である。③は2002年度のオリンパスカメラ全アジア地区広告主題曲として香港出身の女優・歌手の梁詠琪が普通話で歌ったものである。④は③の広東語バージョンである。梁詠琪は近年数多くの映画に出演しており、我が国でも公開され大きな反響をよんでいる。⑤は平井堅の「瞳を閉じて」を台湾出身の歌手の游鴻明が中国語（普通話）でカバーしたものである。⑥は宇多田ヒカルの「Automatic」を香港出身の女優・歌手の陳慧琳

が中国語（普通話）でカバーしたものである。陳慧琳は、江國香織・辻仁成の小説を基にした映画「冷静と情熱のあいだ」において竹野内豊とともに主人公を演じたことでも話題になった。

本時のねらいは、中国語の童謡や中国語のポップスに触れること、我が国でもよく知られた曲が中国語のカバーによって中国でも聴かれているという現代の状況を知ること、また、同じ曲であっても言語の違いによって生じる曲想の変化を感じ取ることである。やはりポップスの曲やカバー曲になると生徒の反応がよく、授業終了後に「歌ってみたい」、「CDを貸してほしい」という生徒もいた。また、日本語のオリジナルバージョンよりも中国語のカバー曲の方が好きという生徒もいた。

5. 中国語の歌の発音に対する生徒の意識

はじめて触れる中国語に戸惑いながらも、授業を重ねるにつれて完全ではないにしろ中国語の発音も安定し、全体的には歌そのものを楽しむことができた。生徒の中には、中国語の発音の美しさを感じ取りながらも、慣れ親しんでいる日本語や英語の歌のように歌えないことにもどかしさを感じる者もいたようである。

では、本授業が目的としている歌詞の発音について生徒はどのような点に注意していたのだろうか。授業後に行った質問紙調査では、「日本語の発音に簡易化してしまわないよう心がける」、「zaiなどをやわらかく発音する（＝無気音の発音に注意する）」、「カタカナに頼らない」、「-ngの発音に気をつける」などが多かった。

また、「草原情歌」の歌詞で特に難しかった部分として、第2フレーズの「yige」、および最後のフレーズの「huitou」、「liulian」、「zhangwang」が挙げられる。その他、全体的に「-n」と「-ng」の違いなどを挙げる生徒が多かった。短時間の授業ですべてをマスターすることは出来ないが、これらのことから少なくとも歌詞1つひとつの発音に注意しながら歌っていたことがうかがえる。

もちろん、必ずしもすべての生徒が中国語の歌に興味・関心を寄せたわけではない。中国語に限らず、韓国語やフランス語など生徒が日常的に接することが少ない言語の歌を扱う場合には、生徒自身が異質なものを（あるいは非日常的なものを）をどのように受容すればよいか困惑する場合がある。したがって、授業の導入において目的意識をもたせることと、歌唱に必要な基礎的知識の説明、および発音のトレーニングをする必要がある。

6. 教科書掲載「草原情歌」の現状

先述した3社の教科書出版社から出版されている高等学校の音楽の全教科書の中で、4種が「草原情歌」を掲載しており、その内容をまとめたのが表3である。日本語訳詞、中国語歌詞、カタカナ発音の付け方は各教科書によって相違がみられる。2の教科書では日本語訳詞のみが記載され、中国語歌詞がない。3の教科書では繁体字による歌詞のみが記載され、日本語訳詞が省かれている。中国語歌詞を記載している1、3、4はいずれもその発音をカタカナによって表記しているが、表記した人の個性が出たのか、多数の相違点がみられる。記譜に関していえば、3の教科書のみがd-mollであり、1、2、4はh-mollとなっている。これは、3の教科書のみが他の教科書と異なり、先述した中国で親しまれている旋律をベースにしていることと大きく関係している。というのは、中国で親しまれている旋律の音域は1オクターブ内であるのに対し、他の3種の教科書に掲載されている(=日本で親しまれている)旋律の音域は1オクターブと短3度にわたっており¹¹⁾、高校生が歌唱可能な音域を考慮した結果であると考えられる。その他、アウフタクト、フェルマータ、アーティキュレーションの処理等に若干の相違点が確認できるが、本稿では詳細に論じない。

表3 「草原情歌」を掲載している教科書とその内容

	出版社	教科書名	日本語	中国語	カタカナ
1	音楽之友社	新 高校の音楽2	1番	簡体字	あり
2	教育芸術社	高校生の音楽1	1~3番	なし	なし
3	教育芸術社	Mousa 1	大意のみ	繁体字	あり
4	教育出版	Tutti 音楽1	1番	簡体字	あり

また、この「草原情歌」を「青海地方民謡」とするのは問題があることが指摘されている¹²⁾。「草原情歌」は作曲家の王洛賓が青海省のチベット民謡を漢族風にアレンジしたものだといわれているが、坪野(1997)は、チベット民謡の「ラ・シェー(山歌)」から合いの手を省略したもの、あるいは漢族の山歌でチベット音楽の影響を受けたものが「草原情歌」となった可能性がある¹³⁾と述べ、「『草原情歌』は、チベット文化と漢族文化が交差し、政治的に不明瞭なものとした一例」であり、「単に『中国青海民謡』ではない」ことを明らかにしている。この状況を考慮すると、高校の教科書に記載されている説明は非常に曖昧で音楽学的に誤った印象を受ける恐れがあるといえる。つまり、このような背景を無視して「草原情歌=中国の代表的な民謡」という図式を作り上げるのは、生徒に誤解を生じさせる危険なことである。

教科書に中国語の歌詞が記載されている場合には必ずその発音がカタカナで付されているが、そのカタカ

ナにも問題がある。そもそも中国語の発音をカタカナで表記すること自体に無理があるので、発音の基礎を少しでも身に付けカタカナ表記の限界を真に理解し、中国語の響きの美しさを生徒に伝えたいものである。一例を挙げると、タイトルにある<草原>の発音が<ツァオ ユアン>と表記される場合が多いが、ピンインではcaoyuanと綴る。このyuanはüanというように介音üから開始される音である。したがって、実際の発音は<ユエン>に近いので(しかし日本語で「ユエン」と発音するのとも異なるので、あくまでも「近い」という表現しかできない)、注意が必要である。

7. おわりに

今日では多くの外国語の歌が生徒の音楽生活に溶け込んでおり、音楽の授業においてどのように外国語の歌を扱うことができるのかということは、大きな課題の1つである。しかし、外国語の歌はさまざまな文化的側面や音楽的側面を含んでいるため、何を主軸とするかによってその扱い方は大きく異なる。本稿は、外国語の曲を歌う際に「発音するのが難しい」、「発音に気を取られると音程が取れなくなる」という生徒の訴えに端を発しており、歌に付された歌詞(言葉)に焦点を当てた歌唱活動を形成することによって、生徒の抱える課題を克服できるのではないかと考えに基づき、学習指導要領解説および教科書の分析・検討を行うとともに、中国語の歌を用いた授業実践を行った。歌を歌うということは日常生活の中でありふれた行動であり、そのことを特別に意識化することはあまりない。しかし、言葉を付けて歌うためにはその言葉を発することが必要不可欠である。そのようなごく当たり前のことを意識化し、さらに、言葉を発するためには自分の体をどのように運動させたらよいか、そしてその運動を歌にどのように結び付けたらよいかということを生徒は学び取ることができた。したがって、外国語の歌を取り扱う際には、生徒が歌唱しやすい環境を設定するという観点から、時間の許す限り歌詞の発音や構音のトレーニングを取り入れることが望ましいと考えられる。なお、発音の複雑さという観点から中国語をとり上げたが、日常的にとり上げられることのない他の言語に関しても、本稿で提示した授業実践モデルを基に、生きた授業のアプローチが可能であると考えられる。

授業実践では言語のみならず、中国の音楽文化についても言及することができた。しかし、中国は国であって国でない。さまざまな民族が1つの集合体となり国家を形成している。すなわち、文化が非常に複雑であり、このような状況から適切な情報を取捨選択した

りその情報の真偽を確認したりする際には常に注意を要する。したがって、授業計画および実施の際には音楽学者などの専門家と学校の教員が可能な限り互いに歩み寄り、研究と実践の相互作用（共同作業）の中で学校音楽の在り方を検討することが望ましいであろう。この点に関しては稿を改めて述べるものである。

最後に、広島大学大学院教育学研究科博士課程後期在学の曹念慈さんから中国語に関するアドバイスをいただき、中国語の音声教材・歌唱教材作成に協力していただいたことを付言する。

註および参考文献

- 1) 文部省『高等学校学習指導要領解説 芸術（音楽 美術 工芸 書道）編 音楽編 美術編』教育芸術社 2001
- 2) 同上 p.19
- 3) 我々は日常的に「発声」や「発声法」という言葉を使う場合、単純に体から声を出すこと、喉を開けて（正確には喉頭蓋をコントロールして）歌うこと、声を体のどの部分に響かせるか、あるいは地声と頭声の発声などを指すことが多い。
- 4) 柴田睦陸「発声」下中邦彦編集『音楽大事典』第4巻 平凡社 1982 pp.1865-1867
- 5) 前掲書1) p.20
- 6) 同上
- 7) たとえ我々が母語とする日本語の歌詞の付された曲であっても、ただ歌詞を朗読する場合と旋律に付して歌唱する場合とは明らかに発声の仕方は異なる。したがって、日本語の歌を歌う場合でも話すとき言葉と歌う時の言葉の発音の違いについて十分留意しなければならない。
- 8) 本校で使用している教科書『高校生の音楽1』（教育芸術社）には日本語の訳詞のみしか付されていないため、原語の歌詞およびピンインを記載したプリントを別に用意した。
- 9) 本授業で扱う普通話（標準中国語）は北京語の発音を標準音としているため、zhi, chi, shi, riなどの捲舌音に関しては中国国内においても北方の民族以外は苦手であるといわれている。しかし、「教科書では標準中国語を念頭においているはずである」（増山賢治「学校教育における中国音楽をめぐって」『音楽教育学研究1』音楽之友社 2000 p.167）ことや、本授業では発音を意識化することが目的の1つであることを考慮すると、注目すべきポイントであるといえる。
- 10) 授業中に行った調査では、言語活動の中でも「詩の朗読」から音楽的要素を感じ取る生徒が多かつ

た。

- 11) 3の教科書の音域はD4-D5、その他の教科書の音域はB3-D5である。ちなみに、中国の人民音楽出版社の音域はF4-F5である。
- 12) 坪野和子「『草原情歌』をめぐって」『チベット文化研究会報』第21巻第2号 チベット文化研究所 1997 pp.9-11、および増山（2000）pp.164-176参照。
- 13) 坪野（1997）p.11

資料1 春晓

春 晓	孟浩然
chūn xiǎo	Mèng Hàorán
春 眠 不 觉 晓，	chūn mián bù jué xiǎo,
处 处 闻 啼 鸟。	chù chù wén tí niǎo.
夜 来 风 雨 声，	yè lái fēng yǔ shēng,
花 落 知 多 少。	huā luò zhī duō shǎo.

資料2 草原情歌の歌詞

草原情歌
cǎoyuán qíngē
在 那 遥 远 的 地 方
zài nà yáoyuǎn dì dìfang
有 一 个 好 姑 娘
yǒu yíge hǎo gūniáng
人 们 走 过 了 她 的 身 旁
rénmen zǒuguò liǎo tā dì shēnpáng
都 要 回 头 留 恋 地 张 望
dōu yào huítóu liúliàn dì zhāngwàng

「了」は口語ではleと発音されるが、歌唱する際にはliaoと発音されることが多い。同様に、「的」「地」も口語ではdeであるが、歌唱する際にはdiと変化することが多い。